

【学会レビュー】

経営哲学学会第22回大会「経営哲学への挑戦」

大石 剛

「生命尊厳を最高の価値基準とし、人間性に基づいた企業の指導原理を確立するための経営哲学の研究を目的とする」経営哲学学会は22年目を迎え、その全国大会が2005年9月2日から3日間、明治学院大学・白金キャンパスにおいて開催された。当学会は、多くの参加者が同時に統一テーマを考え、かつ討議する場を持つという趣旨で前回（会場校：青森公立大学）から全国大会の運営方式を従来の研究報告中心からセッション（パネルディスカッション）重視へと変更し、2日間に3つのセッションを開催した。

第1セッション「エスタブリッシュメントへの挑戦」においては、大石が問題提起を行い、続いて産業界から酒造メーカー（株）一ノ蔵（宮城県）櫻井社長、学会から早稲田大学・厚東教授から報告があり、ディスカッションを行った。以下は、大石の問題提起要旨である。「成長の限界が到来しているわが国経済において、産業界における秩序の固定化が進行しつつあり、それが参入障壁を高め、企業経営の保守性をもたらしている。この状況から脱するには、既成秩序に挑戦する企業の輩出が必要である。また、既成秩序に挑戦するだけでなく、グローバル化に対応し、長期にわたり顧客の高い支持を集めることのできる企業になるためには、自らの経営哲学を語り、経営リテラシーを熟知し、そして戦略的思考に富む経営者の存在が不可欠である。」

第2セッション「未踏市場への挑戦」においては、産業界側からセブンイレブン・ジャパンの元社長工藤健氏が「創造と革新」というテーマで報

告を行った。同氏によれば、セブンイレブンの主な成功要因は、時代の変化の洞察と変化への柔軟な対応である。すなわち、買い手市場への変化に対応して顧客中心の物流体制に切り替え、情報システムの整備と活用を行い、食品メーカーとの共同開発により潜在需要を顕在化し、さらには二つのジャスト・イン・タイム制度（1日3便制、商圏把握の徹底による品揃え）を導入したことなどである。

また、第3セッション「困難の克服からの挑戦」においては、輸入牛肉問題で揺れる吉野家ディー・アンド・シーの安部社長から報告があった。同社長は、環境激変が吉野家のビジネスモデルにとって進化の環境となったこと、そして「人々のために」という理念を実践することが経営活動の目的であり、これを全員が共有して整合性のある矛盾の無い実践に努めるというのが誇りある組織体であることを強調した。

このように学会と産業界の密接な交流は、いうまでもなく双方にとって意義深いことであり、参加者は改めてそれを認識した。今後もこの方式は継続することになろう。また、理念なき組織は、激変する環境に対応できず迷走する。そのことは今回の大会でも明らかにされた。すなわち、企業経営を支える基軸は、経営理念（経営者の哲学、志、あるいは夢）を出発点とするビジョン——経営戦略——システムのセットであり、優秀企業にはこれが強力なバックボーンとなっているということである。